



特集 市民参加

あなたの一步が世界を変える



## アジアの“カ・ラ・テ”

from Nepal ネパール



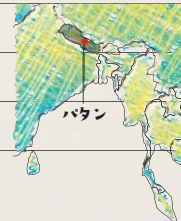
“Are you Japanese?” “Yes, Japanese. KA・RA・TE!?”

いきなり握りこぶしのポーズをとる女の子。ここはネパールの古都バタンの路地裏。白い道着を身に着けた彼女たちは、日本人に親しみを持ったのだろう。満面の笑みで駆け寄ってきて、私に話し掛けてきた。今日は土曜日で学校は休み、朝から空手教室に行ってきたそうだ。

ネパールでは空手の知名度が高く、街中にもいくつか教室がある。現地の知人も日本の空手道を学び、小さな子どもたちに手ほどきをしているそうだ。

そして、日本からも多くのボランティアがこの地を訪れ、柔道や空手などを指導している。スポーツを通じた国際協力のみならず、日本の武道の精神である忍耐力や礼儀作法なども伝えていくと聞く。

世界で活躍する日本人ボランティアの皆さん、そして、日本の武道を学ぶ開発途上国の人々に「ガンバレ！」のエールを送りたい。



撮影：篠原千代子（埼玉県）

## あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や開発途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

\*応募作品は本コーナーのほかに、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)



「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

## Contents

02 my photo アジアの“カ・ラ・テ” ネパール

04 特集 市民参加

## あなたの一歩が 世界を変える

国際協力ご当地自慢！私の地域はここがウリ  
できることから始めよう！あなたに合った方法は!?

Stage1 地球ひろばで世界を学ぼう

Stage2 始めの一歩を踏み出そう

Stage3 教室からたすきをつなぐ 高知 & ラオス

Stage4-1 笑顔が届ける歯磨き指導 川口 & トンガ

Stage4-2 寒冷地技術で都市の未来を変える 旭川 & モンゴル

Stage5 ラジオが高める防災力 神戸 & インドネシア

国際協力のイロイロ IN JAPAN

あなたの地域の“オモシロ人”発見！



24 JICA STAFF 奥村 真紀子 JICA地球ひろば 地域連携課

25 JICA UPDATE

26 VOICE 平野 克己 独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所

28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ケニア

## 地域で守る命



37 イチオン! 本・映画・イベント

39 MONO語り 自然に優しいスパイスを食卓に

40 私のなんとかしなげや! 佐藤 隆太 俳優



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

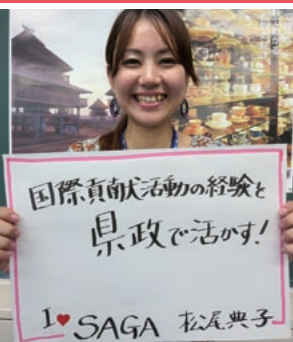
撮影：久野真一

JICA地球ひろば(東京・市ヶ谷)を訪れた中学生。地球案内人から開発途上国の防災の取り組みについて学ぶ



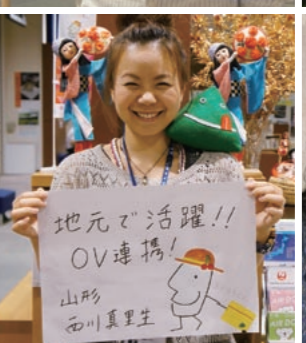


特集 市民参加  
あなたの一步が  
世界を変える



# 国際協力ご当地自慢! 私の地域は

日本各地に広まる国際協力。  
それぞれの地域の特徴を生かした取り組みを  
国際協力推進員\*が一挙公開!





# できることから始めよう! あなたに合った方法は!?

今、世界を変えるために必要なのは市民の力。  
それぞれの強みを生かした世界とのつながり方がきっとあるはず。  
あなたにピッタリの国際協力にご案内!!

## Citizen participation Stage 5



### 相互の学び合い ～国際協力でみんなが元気に

環境、医療保健、防災…。  
実は、共通の課題も多い日本と途上国。  
国際協力はもはや、日本→途上国の一方通行ではない。  
その知識と経験を共有し合い、  
みんなで世界を元気にしていこう。

<CASE>→18ページへGO!

## Citizen participation Stage 4



### 海外でやってみる ～技術・地域の強みを生かして

日本が誇る“職人魂”、地域に伝わるちょっとした“知恵”が、  
実は異国の地では大活躍!? 自身が培ってきた技術を使って、  
途上国に貢献できる方法を探してみよう。

<CASE>→14、16ページへGO!

## Citizen participation Stage 3



### 国内でやってみる ～学校でできること

子どものころから“世界とつながる”感覚を身に付けてほしい。  
グローバル人材の育成を目指して広がる開発教育/国際理解教育。  
総合的な学習の時間で、クラブ活動で、途上国について学ぶ学校も増えてきた。  
工業高校はものづくり、商業高校はビジネスを取り入れるなどの工夫も。

<CASE>→12ページへGO!

## Citizen participation Stage 2



### 国内でやってみる ～始めの一步

仕事も勉強もあるし、国際協力に“ガッツリ”関わるのは難しい。  
でもそこであきらめないでほしい。  
インターネット、ソーシャルネットワーク (SNS) の普及で、世界はぐんと身近に。  
あなたの生活スタイルに合った関わり方が見つかるはず。

<CASE>→10ページへGO!

## Citizen participation Stage 1



### 知る・学ぶ～情報にアクセス

開発途上国ってどこ? 国際協力は??  
海外なんて行ったこともないし、なんだか遠い世界のことみたい…。  
それならまず、“知る”“学ぶ”ことから始めてみよう。  
JICAの国内機関には関連の情報やイベントが盛りだくさん。  
ぜひ一度、足を運んでみては。

<CASE>→8ページへGO!

特集 市民参加

# あなたの 世界を変える 一歩が

一昔前までは、ちょっと特別な印象があった国際協力。でもまさに今、そのカタチが変わりつつある。誰でも、いつでも、いろいろな形で…。国境を超えて、ヒトやモノが自由に行き来できるようになったこの時代。海外に行かずとも、インターネットなどを通じて、世界中の「今」に簡単にアクセスできるようにになった。

そして今、私たちの前に立ち上がるのは地球規模の課題。貧困、感染症、環境破壊…。開発途上国で起こっていることの多くは、言わずもがな、回り回って日本の問題でもある。どこかの国での出来事は、決して他人事ではないのだ。

その現状を知り、何かアクションを起こしたいと思う人は少なくないはず。しかし実はずっと前から、日本の「市民」は地道に国際協力の「種」をまき続けてきた。地方自治体、学校、NGO、市民団体、企業がそれぞれの強みを生かし、より良い未来のために奔走してきたのだ。

そしてその種は途上国に根を張り、あちこちで芽吹いている。その一つの象徴と言えるのが、2011年の東日本大震災。この年、世界最大の被援助国となった日本。これまで助けてくれた日本のために何かしたい。一つ一つの思いやりが大きな力となり、私たちが勇気付けたのは記憶に新しい。

奇しくも日本は、阪神・淡路大震災、東日本大震災などの大災害をきっかけに、世界とのつながりを強めてきた。そして今、国内では「私たちが恩返しする番」と、これまで以上に市民による国際協力の輪が広がりをみせている。子どもから大人まで、北海道から沖縄まで、その力は無限大だ。

あなたの一歩が何かを変えるきっかけになるかもしれない。日本の、世界のために、ぜひその一歩を踏み出してほしい。

写真撮影 Stage1: 久野真一 Stage4, 5: 今村健志朗  
イラスト ©Tomacco/iStock Vectors/Getty Images



特集 市民参加  
あなたの一步が世界を変える

★体験ゾーンで  
“見て聞いて触れて” 学ぼう!

「こんなに重い機械でがれきの下を探索するなんて大変!」「インドネシアでの地震による津波がアフリカまで届くなんてびっくり!」自分たちで、展示に触れたりゲームをやってみたり、楽しみながら学びを深めていく。



# 地球ひろばで世界を学ぼう

世界とあなたを結ぶ国際協力の扉一。  
それが東京・市ヶ谷にあるJICA地球ひろばだ。  
今日の訪問者は、埼玉県川口市立幸並中学校の「英語&世界をマナ部」の生徒たち。  
果たして、どんな体験ができるのか追ってみよう!

撮影：久野真一（一部除く）



★ワークショップに参加しよう!

「携帯電話の部品に使う金属は、アフリカなど世界各国から来てるんだって」「私たちにできるのは、今日知ったことを周りに伝えることじゃないかな」。体験ゾーンの後には、地球案内人と世界の現状について考える参加型ワークショップ。身近な話題から途上国と日本のつながりを学び、グループごとに話し合っ

て発表する。  
\*通常は地球案内人による国際協力体験談のプログラムを提供。要望に応じてワークショップも実施。



★地球案内人の話を聞こう!

まず一行が訪れたのは“体験ゾーン”。開発途上国が直面する課題や世界とのつながりなどについて学ぶ展示・相談スペースだ。2013年12月1日まで開催されている企画展は「災害に負けない国づくり 日本発 防災・復興支援展」。“地球案内人”に扮するのは青年海外協力隊の経験者。世界の災害の歴史や途上国での防災の取り組み、日本の国際緊急援助隊の活動などを分かりやすく説明してくれる。

JICA 地球ひろば DATA

市民が集まる国際協力の拠点!

開発途上国に興味関心を抱いてもらおうと、2006年に東京・広尾に設立。展示やイベントなどを通して国際協力の魅力を伝え、NGO・NPO、ODAなどの情報発信、交流の場としても広く活用されている。2012年には東京・市ヶ谷へ移転し、今年の秋には来場者が100万人に達する予定。国際協力を始めたい人から経験のある人まで、ここに来れば誰もが新しい学びを得られる。

【開館時間】  
平日/体験ゾーン: 10~20時、カフェ: 10~17時  
土日祝/体験ゾーン: 10~18時、カフェ: 定休日  
※カフェは12月27日まで、平日10~21時半、土日祝10~17時に営業時間を変更してオープン!  
※登録団体への貸出スペース“交流ゾーン”は平日・土日祝9~21時半  
【休館日】  
第1・第3月曜(体験ゾーン)、年末年始など  
【地球案内デスク】0120-76-7278  
【URL】www.jica.go.jp/hiroba/

★イベント・セミナーに参加しよう!

年間を通じて、各国の文化に関する展示や企業のBOPビジネスなどを紹介するセミナー、映画上映などのイベントが盛りだくさん。NGOなど約650の登録団体によるセミナーもあり、国際協力を知る機会が見つけられるはず!



★食から世界を感じよう!

ランチは2階にあるJ's Cafeへ。各国の在京大使館のお墨つき料理など、“ご当地モノ”が食べられる。途上国の飢餓と先進国の肥満の解消に取り組むTABLE FOR TWOのメニューもあり、1食につき20円が寄附される仕組み。この日はタイのレッドカレー!



地球ひろばが全国に出張!?

市ヶ谷だけではない。JICA地球ひろばの創意工夫にあふれた展示を全国各地で見られるチャンスが! 名古屋地球ひろば(名古屋市)はもちろん、JICAと各地の教育委員会が連携し、今年には埼玉県や群馬県などの教育センターで教員向けに展示コーナーを設置している。また、全国科学館連携協議会との協力で、全国約180の科学館や博物館にも展示の貸し出しを行っている。



岩手県久慈市のもぐらんぴあ・まちなか水族館での国際緊急援助隊の展示

古山三保先生のコメント

JICAが実施しているベトナムでの教師海外研修への参加を機に、英語の授業の中で“ワールドスタディーズ”と名付け、途上国の現状や文化について教えています。世界と自分の結び付きを知り、何かを変えるために行動できる大人になってほしい。JICA地球ひろばは体験しながら学べる展示があり、生徒たちにも親しみやすい。国際協力の第一歩を踏み出すには最適の施設です。



初めて  
知ることが  
いっぱい!





特集 市民参加  
あなたの一步が世界を変える

## クラウドファンディング

何をやるにも必要となるのが“資金”。インターネット上で支援者を募集し、活動資金を集める方法がコレ。共感するプロジェクトを探して、個人の立場で応援してみよう。

例えば…READY FOR?



2011年にスタートした日本初のクラウドファンディングサービス。対象は、社会性の高いプロジェクト。目標金額と募集期間を設定し、ウェブサイトで支援者を募集する。期間内に目標金額に達したら、資金はプロジェクトの発案者へ。成立しなかったら、支援者に全額返金される。東日本大震災の被災地に本を送るプロジェクトなど、これまで約280件が成立。

readyfor.jp/

なんとかしなきゃ!プロジェクト



認定NPO法人国際協力NGOセンター (JANIC)、国連開発計画 (UNDP)、JICAが実行委員会となり、NGOや国際機関、著名人メンバーなどと共に、国際協力の必要性を発信していくプロジェクト。開発途上国、国際協力、国際交流などの情報をウェブサイトやイベントなどを通じて提供。プロジェクトのフォロワーになって、国際協力に参加するきっかけを見つけてみよう。

nantokashinakya.jp/

## フェアトレード

開発途上国で生産された商品を適正な価格で取引し、生産者の持続的な生活向上を支える仕組み。コーヒーやチョコレートなどを買って、現地の生産者に思いをはせてみては。

例えば…フェアビーンズ  
なごや地球ひろば店



フェアトレードコーヒーの輸入・焙煎・卸業務を行う有限会社フェアトレーディング (22ページに関連記事) と、JICA中部のコラボレーションショップ。香り高く焙煎された高品質のコーヒー豆や、世界各地のおしゃれな雑貨がそろう。JICAボランティアの経験者が手掛ける商品もある。

www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/about/shop/

## マイクロファイナンスファンド

貧困層に小口融資を行うマイクロファイナンス機関 (MFI)。グラミン銀行などに代表されるこのMFIに対して、日本から投資を通じて支援するという新しい協力のカタチ。

例えば…NPO法人Living in Peace



世界でMFIの利用者は約1億人。潜在的な顧客は約15億人ともいわれるが、資金供給が追いついていないのが現実。NPO法人Living in Peaceは証券会社のミュージックセキュリティーズ株式会社と提携し、MFIの資金調達を応援するファンドを企画。日本の個人投資家とカンボジアやベトナムのMFIをつなぐ仕組みをつくらせている。

www.living-in-peace.org/

## プロボノ

「公共善のために」を意味するラテン語「Pro Bono Publico」が語源。職業上で得たスキルや専門知識を生かしてできる社会貢献。思わぬところで、あなたの仕事の経験が役立つかも。

例えば…NPO法人サービスグラント



プロジェクトマネジメント、調査、マーケティング、デザイン、ウェブ制作…さまざまな知識と技術を持った社会人が“プロボノワーカー”として登録。その強みを生かしてNGOを支援する。プロボノワーカーが本業と両立できるよう、どのプロジェクトも4~6人体制。週5時間、約6か月間の参加が基本。東京、関西 (大阪・京都・神戸)、広島、佐賀などで実施中。

www.servicegrant.or.jp/

## 寄附

現地には行けないけれど、世界の課題に取り組む人たちを支えたい! その思いをお金や物品に換えるのが寄附。最近では、インターネットを通じた募金など手軽な方法も増えてきた。

例えば…世界の人びとのためのJICA基金



貧困削減、医療や教育の提供、環境問題の解決などに取り組む団体を公募。一般の人々からの寄附が採択団体の支援に充てられる。例えば、NPO法人アmani・ヤ・アフリカはJICA基金を活用し、ケニアで進学ができない子どもたちを支援している。

www.jica.go.jp/partner/private/kifu/01.html  
amani-ya.com/

# 始めの一步を 踏み出そう

実は、日常生活の中には国際協力のヒントがいっぱい。寄附やボランティアはもちろん、最近では気軽に参加できる方法も増えてきた。まずは行動することが大事!

## ボランティア

NGOなどのオフィスでの事務作業からプロジェクトの企画、在宅での翻訳作業、イベントの補助まで、場所も時間もライフスタイルに合わせて選択可能。

例えば…公益社団法人  
シャンティ国際ボランティア会



(くもりのちはれせんたくあちゃん/さとうわきこ作/福音館書店)

カンボジアやラオスに建設した図書館や学校の子どもたちに絵本を届けるため、日本語の絵本の文章に現地語の翻訳を印刷したシールを貼り付けるボランティアを募集。次回は2014年1月より募集受付開始。

sva.or.jp/

ボランティアができるNGOを探そう!  
国際協力NGOセンター (JANIC) www.janic.org/  
関西NGO協議会 www.kansaingo.net/  
名古屋NGOセンター www.nangoc.org/



## 高知 & ラオス

### 土佐の国から 手を差し伸べたい

不思議なもので、高校時代のことは、なぜか鮮明に覚えている。あの日、あの時、あの場所……。もちろん、全てではないが、大人になってもそれは「昨日のこと」のようにも思える。それほど、10代の思い出は特別なものだ。

「ラオスは初めての海外、しかも開発途上国。第一印象は戦後の日本のように、ショックを受けたのを覚えています。でも子どもたちが元気いっぱい迎えてくれて、一気に不安が吹き飛びました。」

そう話すのは、高知市立高知商業高等学校の卒業生、高橋謙司さん。1996年、高校生活最後の夏休みにラオスの地を踏んだ一人だ。高知商業とラオスのつながりといえば、高知県内ではちょっと有名。その出会いは93年、生徒会メンバーのある一言から始まった。「貧しい国の人たちのために、何

か形に残る協力ができないかな。」そこで、地元NGOを通じてつながったのがラオス。「あれから20年、毎年8月のラオス訪問がライフワークになりました」と岡崎伸二先生（現教頭）は笑う。ラオスに学校を建てる。高知商業が行き着いた、途上国との関わり方だった。

そしてここには、学校で長く国際協力を続けるための工夫が。校内に「模擬株式会社」を設立し、生徒、教職員、保護者が一株500円で株を購入。その資金を使って毎年夏に現地で仕入れた民芸品などを、文化祭や地域のお祭りなどで販売し、その収益の一部をラオスの学校建設に充てるというものだ。もちろん、利益は「株主」にも分配される仕組み。国際協力でビジネス感覚を学ぶ。商業高校ならではのアイデアだ。これまで建設に協力した学校は



昨年の「はりまやストリートフェスティバル」で、ラオスの市場で仕入れた商品をお客様に紹介する生徒たち



高知県内の企業「GARRISON」と商品開発の打ち合わせ。間伐材とラオスの織物をどう組み合わせるかアイデアを練る

6校。「昨年、もう一度原点に立ち返ろうと、現地の人たちが何に困っているのかを調査しました。」そう話すのは弘瀬博英先生。約15年にわたり、生徒会顧問として生徒たちを温かく支えてきた。そこで分かったのが、弟や妹の世話で学校に行けない子が多いこと。「学校に保育園をつくらう！」。生徒たちが出した答えだった。

### 20年を振り返り 後輩につなぐ

そしてもう一つ、2013年の夏に向けて、あるプロジェクトが動いていた。20年の節目の年、みんなの思い出に残る訪問にしたい。誰もがそう考えていた。そこで立ち上がったのは卒業生たち。大切なことをたくさん教えてくれたラオスの人たちに感謝の気持ちを伝えたいと、有志が仕事の合間を縫って集合。みんなで楽しめる

イベントは何かを考えた。そこでたどり着いたのが「学校対抗歌合戦」。実は、ラオスの子どもたちは歌が大好き。これまで建設を支援した学校を集めた大イベントだ。

そして8月。今年の訪問のテーマは「たすき」。先輩から受け継いできた活動のたすきを後輩に託せる立派なものに。現在の生徒会メンバーが思いを込めた。参加者は卒業生も含む総勢約50人。初めてラオスの地を踏む生徒、20年通い続けた先生、10数年ぶりに再訪する卒業生……。その思いはさまざまだった。2年かけて企画したイベントは大盛り上がり。子どもたちはもちろん、現地の先生、保護者からも「毎年やってほしい！」と大好評だった。保育園も無事に完成し、活動の次のステップが見えた訪問だった。

これで終わりではない。帰国してからが現役生の腕の見せどころ。毎年11月に、地元高知の商店街と共催している「はりまやストリートフェスティバル」に向けて、ラオスと日本のコラボレーション商品を地元企業と開発中。ラオスの織物と高知の間伐材を使った雑貨、ナンプラーなどの調味料と地元野菜を使ったお惣菜など、企業の人たちと頭を悩ませながら試作品を作っているところだ。「高知の人に、もっとラオスのことを知



高知商業が建設を支援した保育園の前で。毎年の訪問をみんな楽しみにしてくれている。「最初のころに建てた学校は老朽化が進んでいます。地元の人たちどう維持管理していくかを考えたい」と成瀬先生

## 教室からたすきをつなぐ

開発途上国で困っている人たちの助けたい。高校生の一途な思いが学校を動かした。あれから20年、高知市立高知商業高等学校のラオスの学校建設支援は、新たな一歩を踏み出した。

子どもたちの運動会は毎年の恒例行事に。ラオスへの訪問は生徒会メンバーのパワーの源だ



保育園の落成式では「これで子どもたちも安心して学校に通える」と地元の人たちもうれしそうだった



「学校対抗歌合戦」は想像以上の盛り上がり。各校代表の子どもたちが一生懸命歌う姿を、高知から訪問したメンバーは温かく見守っていた

高知の高校生が大切に紡いできたラオスとのつながり。先生に、地域の人に支えられながら、これからも高校生らしいフレッシュな取り組みを続けていく。



## 川口 & トンガ

### 町の歯医者さんが 国際協力の道へ

「今から歯磨きをします！みんな校庭に集まってください」  
 ここは、太平洋に浮かぶ島国トンガ。快晴の空の下、小学校の校庭に子どもたちが集まってきた。歯ブラシ片手に、横一列に整列。「一本一本丁寧に磨きましょう。イチ、ニ、イチ、ニ」。デンタルセラピストの掛け声に従い、歯磨きの練習が始まった。  
 この歯磨き教室を企画したのはトンガ保健省の職員たち。そして彼らに協力するのが、日本のNGO、南太平洋医療隊だ。  
 開発途上国で歯科医療を広めた。1998年、歯科医師や歯科衛生士、看護師などが集まって誕生した南太平洋医療隊。その中心となったのが、町の歯医者さん、埼玉県川口市にあるカワムラ歯科医院だった。歯科医師の河

## 笑顔を届ける 歯磨き指導

歯磨きの習慣が根付いていない太平洋の島国トンガ。日本の歯科医院から生まれたNGO、南太平洋医療隊は、歯磨きを通じた虫歯予防に取り組んでいる。

村康二さんとサユリさん夫婦が77年に開業した小さなクリニックだ。「日本でも70年代は大人も虫歯だらけ。でも、永久歯の治療にも限界がある。子どものころから丈夫な歯にしてみたい」と、小児歯科を始めました。  
 そして、この状況は日本だけではなかった。世界には、歯ブラシもなく、歯医者さんにも行けない子どもがたくさんいる。海外への関心が高かった河村さん夫婦は仕事の合間を縫い、バヌアツで短期のボランティアを始めた。「途上国では虫歯があれば抜く治療が一般的。抜かなくていい歯まで抜



校庭に並んで歯磨きの練習。みんな元気いっぱいだ



「歯と歯の間に気を付けて磨きましょうね」。歯の模型を使いながら一人一人丁寧に指導する歯科衛生士の飯田さん



人懐っこい笑顔を見せる子どもたちだが、口の中には無数の虫歯が...

### 特集 市民参加 あなたの一歩が世界を変える



[左]虫歯に苦しむ子どもたちを診察する康二さん。「子どもたちには歯で痛い思いをしてほしくないんです」

いてしまい、子どもたちを泣かせてばかりでした。治療方法の違い。河村さん夫婦が直面した壁だった。  
 次のボランティアで訪れたトンガも状況は同じだった。現地では歯ブラシは高価で、ほとんどの人は代わりに木の枝で表面の汚れをさっと落とすだけ。一人当たりの虫歯の本数は平均4、5本もあった。「町の普通の歯医者者の私たちでも、この国の子どもたちの歯を守るためにできることを探したいと思いました」。そこで仲間と声

をかけて南太平洋医療隊を結成し、トンガで活動を始めることになった。  
**トンガ全土に広がる歯磨き**  
 歯磨きの習慣を身に付けてもらうにはどうしたらいいか。活動の第一歩として、南太平洋医療隊のメンバーは、地元の小学校や幼稚園などを訪れ、歯ブラシを提供して歯磨きの方法を指導することにした。しかし、どの子どもも歯磨きをほとんどしたことがない。まずは興味を持ってもらえよう、虫歯の恐ろしさや歯磨きの効果を伝えるため、繰り返し足を運んだ。  
 その地道な取り組みは、トンガの保健省の歯科医師やデンタルセラピストを動かした。最初は「歯磨きなんて意味がない」と言っていた人も、日本の歯医者さんたちの熱意に押され、協力してくれるようになったのだ。巡回先を増やしながら、活動を8年間継続。子どもたちは進んで歯磨きをするようになり、虫歯の数はどんどん減っていった。  
 しかし、まだまだ十分ではない。そう思った河村さん夫婦は、2006年、JICA草の根技術協力事業を通じて新たなステージへ。保健省の協力を得て、現地の歯科スタッフを巻き込み、対象をトンガ全土の小学校、幼稚園に拡

大することにしたのだ。  
 そして日本からも、歯科医師や歯科衛生士、看護師が応援に駆け付けた。カワムラ歯科医院の歯科衛生士、飯田好美さんもその一人。「海外ボランティアにとっても興味があったので、カワムラ歯科医院に就職して2つの夢がかないました」。初めての海外で戸惑いもあったが、現地の歯科スタッフと一緒に歯磨き指導に取り組んだ。  
 日本とトンガ、両国の努力が重なって活動は拡大。子どもたちは自分でお金を出して歯ブラシを買うまでに。活動は「マリマリプログラム」として全国で親しまれるようになった。マリマリはトンガ語で「笑顔」の意味。「虫歯で泣いていた子どもたちが、笑顔になっていった」からだ。  
 さらに河村さん夫婦は、歯科保健や歯の磨き方などをまとめた子ども向けのテキストを作成。これが教育省に公式教材として認可され、全国の小学4年生の学習カリキュラムに組み込まれ保健の授業で使われている。  
 「マリマリプログラムは、もう現地の人たちに任せて大丈夫。子どもたちにも口の健康を守る意識がしっかりと根付いてきました。町の普通の歯医者でも一生懸命やれば、多くの人を動かすことができるんですね」と、康二さん



「虫歯菌を退治しよう!」。なぜ虫歯になるのか、紙芝居で子どもたちに伝える



# 旭川 & モンゴル

旭川市だからこそ  
できること

東京では連日35度近い真夏日が続いた8月末。空港から一步出ると、とても肌寒く感じる。それもそのはず、温度計を見ると20度だ。この日訪れたのは北海道旭川市。北海道のほぼ中央に位置する札幌に次ぐ第二の都市だ。市内を歩いていると、まず目に付くのが車道の広さ。そして、碁盤の目のように整然と区切られた街並みが続く。JR旭川駅の周辺では、鉄道の高架化や駅前広場の整備など、再開発事業が着々と進んでいる。

「冬はマイナス20度になるのも珍しくありません。道路一つとっても、低温の影響でひび割れて傷んだり、道路の下の水が凍って霜柱のように道路を押し上げる。凍上現象」が起きたりと、寒冷地ならではの問題がたくさんあります。市民が快適な生活を送れるよ

うに、試行錯誤しながら建築や土木の技術を開発してきたのです。旭川市役所で都市計画を担当する藤原美彦さんはそう話す。その技術を生かし、旭川市は、官民一体で国際協力に取り組んでいる。その舞台は、同じく寒さが厳しいモンゴルの首都ウランバートルだ。

ここ10年で人口が120万人にまで急増したが、50万人の人口を想定してつくられた都市のため、とても収まりきらない。地方からやって来た人々は「ゲル地区」と呼ばれる郊外に移動式の住居ゲルや小屋を建てて住むしかなかった。ウランバートル市役所は人口増加に対応できず、ゲル地区の上下水道やガス、道路なども整備できないまま。冬はマイナス40度まで気温が下がるため、石炭を燃や

特集 市民参加  
あなたの一步が世界を変える



ゲル地区には水道が整備されていないため、家から遠く離れた井戸に水をくみに行くのは子どもの仕事



ウランバートル郊外に広がるゲル地区。市の6割の人口はここに集中しているといわれる

まず現状を把握しようと、2011年から4回、市の職員と地元建設会社で組織された一般社団法人旭川建設業協会など民間のメンバーがウランバートルを視察。すると、市の中心部でさえ、道路は穴だらけだった。「アスファルトの質の悪さ、施工技術の低さ、維持管理の不徹底など、寒冷地技術を伝える以前の問題が山積みだったのです」。参加者の一人、旭川市都市計画課の伊藤和宏さんは振り返る。そこでこれからの都市づくりの参考にしてもらおうと、ウランバートル市役所の職員延べ9人を旭川市に受け入れて研修を実施。アスファルト工場や浄水場、下水処理場などを視

察してもらった。さらに寒冷地の土木技術を研究開発する独立行政法人土木研究所寒地土木研究所などの施設では、旭川市の都市計画や道路整備技術などを伝えた。旭川建設業協会のメンバー、落合広州さん(株式会社橋本川島コーポレーション)は、「凍上現象を抑えるため、舗装の下の砂利を厚くしたりアスファルト舗装を3重にしたりと、旭川の街にはたくさん工夫が隠れています」と話す。実は、落合さんは大の飛行機嫌い。モンゴルが人生初の海外だった。「ゲル地区で子どもがタンクを抱えて水をくむ姿は衝撃的でした。日本では考えられないと...。それまで私にできることは募金ぐらいだと思っていましたが、自分の土木技術がモンゴルの人々の生活改善につながるかもしれない。そんな可能性に気付かされたのです」と笑顔で話してくれた。



ウランバートル市道路局で寒冷地の課題を共有する藤原さん(右から3人目)と落合さん(右から2人目)

て暖をとる。その煙で大気汚染が引き起こされているのだ。この現状を改善するため、JICAは都市開発の計画づくりを支援。都市再開発法や土地法、住宅法、建設法など、都市開発に必要な法律を整備するため、専門家として2010年に派遣されたのが旭川市の幹部職員だった。

有できることがあるはず。旭川市は大きな一歩を踏み出す。JICA草の根技術協力事業を活用し、ウランバートルの都市づくりを支えることに決めたのだ。

## 地域が一丸となってつながる絆

旭川市役所の藤原さんは、「ウランバートルを住みやすい都市にすることはもちろん、旭川の民間企業の進出にもつなげたいと考えています。すでに旭川建設業協会は、断熱性が高い住宅の販売を目指し、市場調査を始めています」と意欲を見せた。



ウランバートル市役所の建築士エンフトウジンさんから、市の模型を見ながら都市計画について説明を受ける伊藤さん(左端)

## 寒冷地技術で都市の未来を変える

マイナス41度。日本の最低気温の記録を持つ北海道旭川市。寒冷地という特性と向き合い培ってきた都市づくりの経験を、モンゴルの都市問題の改善に役立てようと奮闘中だ。



北海道の研修で寒地土木研究所を訪れたウランバートル市役所の職員たち。車の冬用タイヤチェーンでアスファルトがどうすり減るかを調べる装置に興味津々

旭川市内の道路工事現場では、電気を通して雪を溶かすロードヒーティングの仕組みを見学



特集 市民参加  
**あなたの一步が世界を変える**

メラピ山噴火に関する語り部の番組。過去の経験を掘り起こし、次の災害に備えるための知恵を語り継いでいく



まるでようになり、どんな番組を流せばいいのか、どうすれば復興を進められるかなど意見を交わした。「いつの間にか、ラジオが人々をつなぎ、住民同士が力を合わせるきっかけをつくっていました」と振り返る日比野さん。FMわいわいは、住民が運営し、参加し、地域のために放送する「コミュニティラジオ」となっていた。

震災からしばらく経っても、長田区の住民同士をつなぐ拠点となり続けたFMわいわい。現在も約200人のボランティアを中心に、ラジオ放送だけでなく、食事

**10言語でコミュニティに災害情報を発信**

「アンニョハセヨ。皆さんこんにちは。こちらは77・8MHz、FMわいわい。これから生放送でお届けします」。軽快な音楽とともに、正午のラジオ番組が始まった。兵庫県神戸市長田区にあるラジオ放送局、FMわいわい。日本では珍しく、ベトナム語、中国語、英語、ポルトガル語など10の言語に対応。NPO法人エフエムわいわいが運営し、番組ごとに使用言語が変わる。外国人の多いこの地域で人気の局だ。

多言語放送がこの地で始まったのは、ある背景がある。それは1995年1月17日、阪神・淡路大震災。震源地に近い長田区では、建物のほとんどが倒壊、全焼し、住民の多くは何カ月にもわたり避難生活を強いられた。

その中には、この地域の人口の



ラジオ放送に欠かせない機材の操作方法を指導する日比野さん(右)

神戸 & インドネシア

約1割を占める外国人の姿があった。「彼らの中には日本語ができない人も多かった。炊き出しや救援物資などの情報が分からず、不安そうにしていました」。そう話すのは、当時、避難所でボランティアをしていた日比野純一さん。心細い避難生活を送る外国人を安心させたい。そこで、誰もが参加できるラジオ放送局として誕生したのがFMわいわい。震災発生からわずか数カ月後、日比野さんら被災地の日本人と外国人が協力して立ち上げた。地域に住む外国人の言語で生活情報を伝えたり、各国の音楽を流したりと、少しでも避難所の仲間たちの癒やしになればと必死に活動した。

このラジオの評判は、避難所から避難所へと広まり、「この情報も流したい」「あの言語でも放送したい」と次々とアイデアが寄せられるように。国籍、民族、障害の有無を超えてラジオ局に人が集

**災害の経験を伝え次に備える**

会や交流イベント、防災訓練など、コミュニティに根差した活動を続けている。

そして、その活動の舞台は世界へ。FMわいわいは、110カ国、約4000の団体が加盟する「世界コミュニティラジオ放送連盟」の一員。この組織を通じて同じ災害多発国であるインドネシアのコミュニティラジオ局「リントラス・メラピFM」などと連携し、災害時に、そして災害に備えてどのような活動を行ってきたか、互いの経験を共有しながらノウハウを磨いてきた。

その矢先だった。2010年10月、ジャワ島中部にあるメラピ山が大噴火。辺り一面に噴煙が立ち込め、周辺の村々を火砕流や土石流が襲った。住民の多くは、どう逃げればいいのか分からず、火山の知識がないために途方もない恐怖を感じていた。

しかし、リントラス・メラピFMがある村は違った。普段からラジオ放送やコミュニティ防災活動を通じて、噴火時の避難方法や噴火の仕組みなどを学んでいた住民たち。その効果もあり、被害を最

**ラジオが高める防災力**

ラジオを通じて災害や生活情報を多言語で発信してきたNPO法人エフエムわいわい。その経験を共有したいと、インドネシアのラジオ放送局と住民の防災意識の向上に取り組んでいる。



FMわいわいのスタジオ。この日は、福島県双葉郡富岡町から避難している人たちに情報を発信する「おだがいさまFM」と電話中継

小限にとどめることができたのだ。

メラピ山は今後もいつ噴火するか分からない。この経験は他の地域にも伝えなければ。エフエムわいわいは2012年、JICA草の根技術協力事業を通じて、コミュニティラジオを核に、メラピ山周辺地域の防災対策に乗り出した。

対象となるのは、メラピ山麓にある5つの放送局と6つの村。その中には噴火後に設立された局も。ラジオになじみのない住民が多く、いきなり放送しても聞いてもらえない。そこでまずは、地域ぐるみで災害に立ち向かう重要性を伝えることに。住民を対象に「防災とは何か」「どんな災害対策ができるか」などを話し合うワークショップ、防災教育ゲームや炊き出し訓練などのイベントを通じて、住民の結束力を高めていった。そして、その活動の告知や成果を伝えるために使ったのがラジオだ。

さらに日比野さんらが提案したのが、被災者が「語り部」となる番組をつくること。「阪神・淡路大震災の教訓を受け継いでいくため、私たちは被災者の経験を紹介する番組を放送しています。自分の身をどう守るべきか、多くの人と共有すればするだけ、地域の防災力が高まるからです」。インド

ネシアの人々もこの案には大賛成。メラピ山の噴火の語り部たちが、各局でその体験談を発信し始めている。

「コミュニティラジオは、9割のコミュニティ活動と1割の放送活動で成り立っている」という言葉があります。住民参加型のコミュニティラジオづくりに懸命に取り組む、自分たちの地域を自分たちの手で守ろうとする彼らの熱意に触れると、私たちも原点に立ち返ることができるとです」と日比野さんは目を細める。

リントラス・メラピFMの代表、スキマンさんは「エフエムわいわいは、噴火前から何度も足を運んでくれ、協力してきた仲間です。この先も学び合いながら、互いの地域を守っていききたい」と話す。日本とインドネシアのコミュニティラジオが共に目指すのは、災害に強い地域づくりだ。



インドネシアの活動現場にフィールドスタディーで訪れた日本の学生たち。「日本の若者にも途上国の人々と交流し、現状について知ってもらいたい」と日比野さん



子ども向けの防災教育について話し合う住民たち。女性たちがその中心だ



### 広島から平和の担い手を育てる

原爆投下という悲しい歴史を繰り返すまいと、渡部朋子代表を中心に、国内外で復興支援や次世代の若者への平和教育に着手。まさに今、長年の紛争からの脱却を目指すフィリピンのミンダナオでも平和教育の普及に取り組む。



NPO法人ANT-Hiroshima

### 世界とつながる“ひろば”

在住外国人と市民が気軽に交流できる施設。異文化紹介や語学教室など多彩なプログラムを用意。農家などでの研修のアレンジも行っている。新潟県中越地震時の助け合いの経験から、“顔の見える関係”を大切にしたい長岡ならではの心温まる交流がウリ。



長岡市国際交流センター「地球広場」



鹿児島県 アジア・太平洋農村研修センター

### 研修員受け入れで地域を元気に

農林水産業が盛んな鹿児島県。農村振興、環境保全など、開発途上国の参考になるような取り組みが多いことから、現地からの研修員受け入れに積極的。地元の人たちが地域の歴史や現状、課題について見直す機会にもなっている。

### 島の知見でリサイクル!

閉ざされた環境の島しょ地域が抱える課題の一つがごみ。その解決のためには、まずは、地域にリサイクル文化を根付かせることが大切。沖縄の経験を持ち、大洋州に浮かぶトンガのパバウ島で住民・行政・民間企業が総出で行うリサイクルの仕組みづくりに挑戦中。



沖縄リサイクル運動市民の会

### Bangladesh が瀬戸内を彩る

今夏の瀬戸内国際芸術祭では、高松港で Bangladesh の首都ダッカの市場を再現! 現地から約100人の職人、演奏家、ダンサーなどが来日し、連日エネルギー溢るパフォーマンスを披露した。青年海外協力隊の経験者も通訳として活躍。



瀬戸内国際芸術祭2013

# 国際協力の イロイロ IN JAPAN

特集 市民参加  
あなたの一歩が世界を変える

日本国内にも、実は、あなたの身近なところに  
世界とつながる“窓”がある—。  
全国津々浦々、日本の地域が生み出した  
イロイロな取り組みを紹介。



NPO法人アクセス  
-共生社会をめざす地球市民の会

### 4 マイクロクレジットで貧困から脱却

フィリピンの農村で女性グループを立ち上げ無担保で融資。その資金で、養豚、炭作り、軽食の調理・販売、トライシクルの営業などを行い生計向上を目指す。経営力を身に付けるセミナーも実施。毎年恒例のスタディーツアーには関西の学生が多数参加している。



国立大学法人名古屋大学  
農学国際教育協力研究センター

### 3 酒造りで地域おこし

ボル・ボト時代に失われた伝統産業を取り戻したい—。カンボジアで消滅の危機にあった米の蒸留酒“スラソー”をよみがえらせるべく、伝統的な蒸留手法を生かしつつ、日本が誇る工程管理を徹底指導。「Suraa Takeo」として商品化にこぎ着けた。首都プノンペンのレストランやホテルで大人気。

### 2 地震の苦しみから共に立ち上がる

東日本大震災の被災者が語り部となり、防災・減災の知識を伝える巡回ワークショップ「むすび塾」。その舞台は国内にとどまらず、同じく大地震を経験したインドネシア・バンダアチェへ。被災体験を共有することで、両国の思いが一つに。互いに励まし合いながら、住民主体で災害に強いまちづくりに取り組んでいる。



株式会社河北新報社・むすび塾

### 1 教室を飛び出して羽ばたく

国際感覚を持った“Globalist”を育てたいと、2005年にグローバルコースを設置。マレーシアの高校への訪問、カンボジアやベトナムでのボランティア、JICA研修員やJICAボランティアの経験者との交流などを通じて、世界に目を向け、国境を超えて人を思いやる心を育てている。



北海道札幌清田高等学校





## 世界を感じて地元を見つめ直す！

能登の魅力を全国に発信するために結成された“のとガール”。そのメンバーは、ニカラグア、セネガル、ジンバブエの青年海外協力隊OGです。3人の出会いは、金沢大学と県や市、町が地域ぐるみで開催する「里山里海マイスター育成プログラム」。日本で初めて「世界農業遺産」に認定された能登の自然や文化、産業、歴史を知り、地域づくりに貢献する人材を育てる事業です。能登出身のメンバーに加え、東京から移住したメンバーもいます。

メンバーの一人が協力隊員として活動していたニカラグアの農村部では、仕事がなく、働き盛りの若者が地元を離れてしまうという問題がありました。帰国してみると日本も同じ。能登でも過疎化が進んでいたのです。そこで、能登を元気にしたいと企画したのが、農業体験などができる「能登ライフ体験ツアー」。観光では分からない、地元の魅力が発見できると好評です。のとガールの強みは実行力。まず自分が動かなければならないのは、まさに協力隊時代と同じ。途上国での経験を生かし、これからも能登をアピールしていきます。



能登を視察するアフリカからの研修員と交流するなど、国際協力にも取り組む

のとガール  
水口 亜紀さん、松井 久美さん  
中谷 なほさん

[ameblo.jp/noto-activity/](http://ameblo.jp/noto-activity/)



## 地域の魅力を見直すきっかけに！

合同会社大地のりんご代表

道山 マミさん

[daichinorin5.namaste.jp/](http://daichinorin5.namaste.jp/)



地域の人々が力を合わせ、土をつくり、食物を育てる。祖母が言っていた“豊かな暮らし”を目指し、大学では農学部で食品加工を学びました。キャンパスは北海道の網走。広大な土地を機械で耕しているのを見て、農業ってカッコいい！と。その後、長年の夢だった青年海外協力隊に応募し、ネパールの農村でオレンジやレモン、マンゴーなどを使ったジャムやジュースなどの農作物加工を指導しました。

そして2007年、大学の恩師の誘いで再び北海道に移住。農作物を加工・流通・販売し、地域活性化を目指す会社を設立しました。網走の畑にはあちこちに貴重な“資源”がたくさんあるのに、地元の人たちは当たり前すぎて気付いていない。“知恵をひねればなんとかなる”という協力隊精神で一念発起し、2011年に独立。農家の皆さんの知恵を借りながら、規格外で市場に出せない山わさびを使って「ガツンと辛い山わさび粕漬」を商品化。これが漬物の日本一を決めるT-1グランプリで全国1位になり、地域の魅力を再発見するきっかけに。今後も北海道の魅力を発掘し、地域を盛り上げていきます。



北海道の農と食を考えるイベントに地域の人と一緒に出店

特集 市民参加  
あなたの一步が世界を変える

# あなたの地域の“オモシロ人”発見！

国際協力といっても、関わり方は人それぞれ。日本での経験や技術を携えて羽ばたく人もいれば、帰国後に現地での経験を日本で生かす人もいる。そんな“オモシロイ”彼らの挑戦を紹介！

## どんな技術でも必ず生かせる！

株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所  
アソシエイトリサーチャー/See-D代表

遠藤 謙さん

[sec-d.jp/](http://sec-d.jp/)



大学でロボットの研究をしながら、ふと思いました。最新の科学技術が実際の生活に役立つのはまだまだ先のこと、自分は何のために研究しているのか。そんな時、友人が義足を必要とするようになり、もっと直接人の役に立つ方法はないかと、最新鋭のロボット義足を学びにアメリカに留学しました。その研究室の仲間から、インドでは地元のNGOが機能性の低い義足を安く配っていると聞きました。私たちエンジニアの技術を使えば、同じ予算でより良いものを作れるのに。でもインドの人々自身が開発に関わり、現地の生産技術に見合った義足を生み出さなければ意味がない。そこでインド医師と試作品を開発し、現在も一緒に改良を進めています。

それと同じことが、私が代表を務めるSee-D Contestでも言えます。日本の大学生や社会人のエンジニア、デザイナーが、途上国の生活改善につながるアイデアを出し合うイベントですが、大切なのは現地のニーズをきちんと調べること。これまでの入賞チームは、ココナツからお酒を作るキットや流通の効率化を図るソフトウェアなどを開発。現地のパートナーとビジネス展開を目指しています。



インドのパートナーと少しずつ義足をモデルチェンジ

## フェアトレードで社会貢献！

貿易を通じて世界のためにできることがある。通関士として働いていたころ、たまたま手に取った雑誌で知った“フェアトレード”。まずはコンセプトを学ぼうとアメリカのフェアトレード認証団体でインターンをし、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラのコーヒー産地を訪問しました。そこで出会った生産者たちは、電気も水道もない生活。収入源はコーヒーだけ、豆の価格は下がる一方という苦しい状況でした。

豆の質はいい。彼らと日本の消費者をつないで何かできないか。帰国後はフェアトレードコーヒーの輸入販売会社を設立し、コーヒーブランド「フェアビーンズコーヒー」を立ち上げました。通関士時代に得た貿易の知識はありましたが、販売や流通、会社運営の経験はゼロ。今考えると無謀な挑戦でしたが、周りに助けられ、何とか軌道に乗っています。自社ブランドのコーヒー、ココアやチョコレートなどのフェアトレード商品を通じて、開発途上国の人々の生計向上に貢献できる選択肢を、日本の皆さんに提供していきたいと思っています。



名古屋の国際協力イベントにフェアトレードのブースを出展

有限会社フェアトレーディング取締役

林口 宏さん

[www.fairbeans.org](http://www.fairbeans.org)





## 日本と開発途上国を結び みんなを元気にしたい

国際協力に取り組む日本の地域に寄り添いたい。JICA地球ひろばの奥村真紀子さんは、地方自治体やNGOなどと連携し、日本と開発途上国双方にとってプラスとなる事業の在り方を模索している。

### お世話になった 人たちに恩返しを

環境問題に関心を持っていた大学生の時です。熱帯雨林の減少は、実は、企業による大規模な伐採が主な原因であること、そもその原因といわれていた焼畑は、現地の人々の知恵に基づいた持続可能な農法だったことを知りました。思い込みで判断してはいけません。そう実感すると同時に、伐採の舞台となっていた開発途上国の人たちの生活や本来の農法について知りたいと思うようになりました。

そこで大学院では3カ月間、インドネシアの農村で調査。その時に出会った現地の人たちは、とても親しく接してくれました。ご飯を作ってくれたり、農家の現状を教えてくださいと、彼らの支えなしでは調査はできませんでした。中でもホームステイ先のお母さんはとても気さくで、インドネシア語で「サブ(ほうぎ)を貸してください」「サブ(牛)を貸してください」と言い間違えてしまったらツツコミを入れてきたりと、いつも私を楽しませてくれました。

一方で、小さな村でさえ、食べるだけで精いっぱいの家から、ビジネスとして農業に投資している家まで、身近に貧富の差がある現実を目の当たりにしました。人々の温かさや彼らが直面する課題に触れ、調査では何もできなかつた自分を振り返り、将来は彼らに恩返しできるような仕事をしたいと思うよう

になりました。

### 国際協力は国内の人々に 支えられている

最初に配属された森林・自然環境協力部(当時)では、水産分野の協力を担当しました。その一つがチリでのプロジェクト。現地の養殖技術者に日本の技術を学んでもらうため、ホタテの名産地として知られる北海道南部、鹿部町にある団体に研修を受け入れてもらいました。私も同行したのですが、「誰かの役に立てるなら」と、ホタテ養殖の技術を懸命に伝えようとする地元の人たちの姿には心を打たれました。研修員もその熱心な指導に感銘を受け、必死に技術を学び取ろうとしていました。日本国内にも途上国に貢献したいと思っている人がたくさんいる。彼らにもっと寄り添ってできることはないかと考えるようになりました。

次の国内事業部では、国内のNGOや大学、地方自治体などと連携して途上国の課題解決を目指す「草の根技術協力事業」の立ち上げに携わりました。新しい制度のため、まさに全て手さぐり状態。周りの人の意見も取り入れながら、チーム一丸となって何とか実施にこぎつけました。

### 地域の人たちとの 連携を深める

現在は地球ひろばで、日本人の良さ、地



JICA地球ひろば  
地域連携課  
主任調査役  
**奥村真紀子**  
OKUMURA Makiko

大学院卒業後、2000年にJICAに就職。森林・自然環境協力部(当時)、国内事業部、総務部、ヨルダン事務所を経て、2011年6月から現職。

域の強みを生かした国際協力を模索しています。その一例が農業が盛んな群馬県の甘楽富岡地域。NPO法人自然塾寺子屋が橋渡し役となり、派遣前の青年海外協力隊員や途上国からの研修員に、農業や農産物加工などの技術を伝えています。

この研修には、農家や女性グループなど、実に多くの地元の方々が協力してくださっています。彼らに甘楽富岡での研修がどう途上国で役立つのを見てもらいたいと、昨年、甘楽富岡の代表者とマラウイに行きました。農家の皆さんも研修を受けた協力隊員がたくましく活動している姿を見て、途上国や国際協力をより身近に感じる事ができました。

この他にも国内には、日本の若者や研修員との交流が地域活性化に役立っている例がたくさんあります。そして私たちは、そんな地域の方々から元気をもらっているのです。私は双方の現場を知る立場として、両者をつなぎ、みんなが明るく前を向いて進める世界になっていけばと思っています。



鹿部町で研修を担当した日本人のスタッフとチリの研修員と



甘楽富岡で研修を受けた協力隊員の活動状況について、派遣先のマラウイの担当者に聞く奥村さん(左)



田中理事長がASEAN3カ国を訪問

01

田中明彦JICA理事長は、8月にミャンマー、ベトナム、ラオスのASEAN(東南アジア諸国連合)3カ国を訪問しました。

8月5日から7日間にわたって訪れたのはミャンマー。テイン・セイン大統領との会談では、JICAの人身取引対策や手話普及の事業が着実に成果を上げてきたことを報告。セイン大統領は日本の大規模な支援が再開されたことへの感謝と、貧困削減や地方開発などに対する一層の支援に期待を示しました。

また、ビジネス人材の育成拠点、ミャンマー日本人材開発センターの開所式に出席。ミャンマー商業省、ミャンマー商工会議所連盟とJICAの協力で設置された同センターは、国際的な競争力を持つミャンマー企業の人材育成はもちろん、日本企業のミャンマー進出を促進する環境づくりへの貢献が期待されています。

8月25日からはベトナムへ。チュオン・タン・サン国家主席と会談し、「日越外交関係樹立から今年で40周年。日本にとって、ベトナムは経済的に支え合う重要なパートナー」と伝えました。2020



ミャンマー日本人材開発センター開所式典でのテープカット



ラオスのトンシン首相(右)と会談する田中理事長

年までの工業国化を目指すベトナムの国家目標を支援するため、成長と競争力強化、脆弱性への対応、ガバナンス強化を重点分野として支援することを表明しました。また、ハノイ市ノイバイ空港第二ターミナルの建設現場やバックマイ病院など日本の支援現場を視察し、農村開発や法整備支援などに携わるJICA専門家やボランティアとも意見交換を行いました。

28日には、ベトナムのフエから東西経済回廊600キロを陸路で移動し、ラオスへ。トンシン・タマヴォン首相との会談では、2015年のASEAN統合を念頭に置いた経済発展への支援を表明し、トンシン首相から基礎インフラや投資環境の整備などへの支援が要請されました。

さらにナムグム第一水力発電所などの視察に加え、投資促進分野などのJICA専門家と面談。日本の支援がラオスの社会経済発展に貢献していることを確認しました。

2013年は日・ASEAN友好協力40周年。JICAは共に成長するパートナーとして、今後もこの地域との関係をより強化していきます。

ベトナムでの気候変動対策で住友林業と連携

02

JICAはベトナムで実施しているREDD+実証活動において、住友林業株式会社と連携協定を結び、官民連携で取り組むことになりました。

REDD+とは、開発途上国の森林の減少・劣化を防止して地球全体の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出量を削減し、かつ、持続可能な森林管理を進めることで森林が持つCO<sub>2</sub>吸収固定機能を高める取り組みです。

実証活動の対象は、ベトナムで最も貧しい地域の一つ、ディエンビエン省。住民による農地の拡大や野焼きなどによる森林減少が問題になっています。JICAは2010年から同省の「REDD+行動計画」の策定や、適切な森林管理と住民の生計向上などを支援。住友林業も2011年からREDD+関連事業を手掛けてきました。

今後は両者が持つノウハウを生かし、森林保全、植林、生計向上手段の多角化など、住民参加による総合的な取り組みを強化していく予定。同省の森林保全活動が強化されることで、地球温暖化対策と住民の生計向上への貢献が期待されています。



REDD+実証活動に向けてディエンビエン省の住民とミーティング

国際協力キャリアの総合情報サイト「PARTNER」10周年

03

国際協力の世界で活躍を目指す人と、そんな人材を求める企業・団体をつなげるウェブサイト「PARTNER」が、今年で10周年を迎えます。

現在、個人登録者は9000人以上、登録団体数は800団体を超え、この業界で役立つ情報が満載だという声から利用者から寄せられています。「PARTNER」では、登録団体が掲載した求人・研修・セミナー情報を検索可能。個人登録者は、対面・メール・インターネット電話などでキャリア相談ができる仕組みになっています。また、プロフィールを公開すると、団体からスカウトメールを受けられるようになります。

さらに、国際協力を本来の業務とする団体・企業に加え、海外での事業展開を通じて開発途上国の開発課題の解決に貢献する企業の情報も掲載することになりました。

日本の国際協力をより良いものにするために、これからもぜひ「PARTNER」をご活用ください。

URL: partner.jica.go.jp/  
Facebook: www.facebook.com/jicapartner





## なぜ我々は 開発途上国を 援助するのか



長年にわたり続けてきた“人を通じた援助”は、途上国との信頼関係の構築に貢献している（撮影：久野武志）



日本企業の技術力を生かしたインフラ整備。日本の経済再生の起爆剤となるか

### 援助政策の からくり

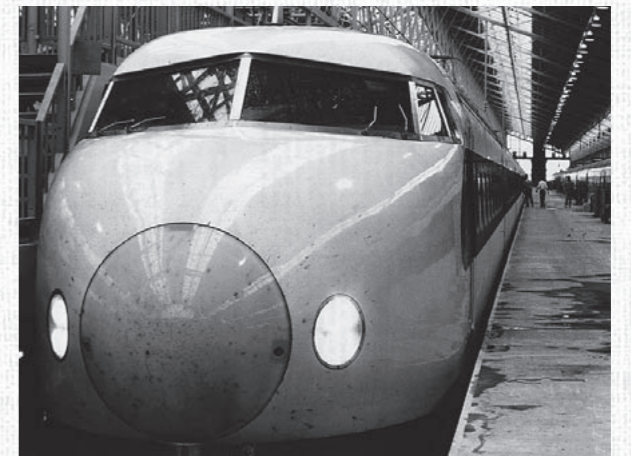
およそ政府の政策は、その目的がはっきりしているものだ。解決しなければならない問題があるからこそ政策はある。そうでなければ、公金を投入する理由が説明できない。

ところが援助政策に関しては、発足当初からそこが明確ではない。援助の政策目的が曖昧で共理解がないというところは、すでにアメリカにおいて1970年にサミュエル・ハンチントンが指摘していたところだ。政策論的に見た援助政策最大の特徴は、実はこの点にある。

日本の援助は、最初のころは「経済協力政策」と呼ばれていた。この時代の政策論は分かりやすかった。第二次世界大戦後、日本は戦争賠償の義務を負ったが、当時の政府はこれを、失った海外市場を再び開拓するために活用しようとした。賠償から経済協力へと静かに移行しながら、なかなかの資金をアジア諸国に提供し続けたのである。

その後、日本経済は復興と成長を遂げ、世界最大の貿易黒字国になっていく。輸出振興が一段落すると日本の援助は、軍事によらない平和国家の外交手段として、国際秩序の安定と維持を目的に掲げるようになる。対アフリカ援助が増え始めたのがこのころで、アフリカのように日本と経済的関係が薄い国であっても、貧困削減を通じて社会の安定化を助け、もって世界貢献を果たそうという志である。援助は、貿易黒字還元の一手段としても位置付けられるようになった。

開発途上国が貧困削減や平和構築を自力で解決



日本もかつて海外から援助を受けていた。東京オリンピックの年に開通した東海道新幹線は世界銀行の融資で建設（提供：世界銀行東京事務所）

### 貧困層に対する 援助の在り方

貧困に苦しむ人々を直接支援する政策を社会政策という。最低限の生活を送るために必要な財やサービスを公的に支給する政策で、援助には社会政策的なものが多い。

70年代末からサハラ以南アフリカがODAの最

援助は国民の負担で賄われている。だから、開発がそうであるように、援助もまたナショナリズムから自由ではない。納税者に対して十分な説明を欠いたままでは、外国人のために日本人の税金を使うことはできない。

援助政策論は主に、経済協力開発機構（OECD）開発援助委員会（DAC）※でつくられてきた。60年代までは異質といつてよいほどバラバラだった各国の援助は、72年にDACでつくられたODA定義で統一された。それからすでに40年が過ぎている。今ではDAC非加盟の新興援助国が多数登場し、現行のODA方式では捉えきれない状況になった。

新興国は自国内での社会政策やセイフティネットが不十分であるため、社会政策的な無償援助を他の国にまで提供する余裕がない。だから援助は借款が中心になる。言ってみれば、国内用の開発金融を、国境を超えて近い途上国でも運用しているのである。中国はこれを「南南協力」と呼んでいる。また、輸出信用など貿易金融の比重が大きい。こういった新興ドナーの政策を「貿易秩序を乱す二流の援助」として非難したり、またDACルールに従わせようとしても、あまり意味はない。

私はODAの定義を改訂することの方が望ましいと考えている。中国をはじめアジア新興諸国の援助政策は日本をモデルにしている。となれば、日本が率先して援助政策の新たな概念と基準をつくってはどうか。その作業のためには、我々は一体何のために援助しているのかを、もつと地に足をつけて、考え直してみる必要がある。

### ODAの定義と 援助潮流の変化

開発はどの時代にも、その国のナショナリズムが原動力になってきた。ナショナリズムの最も健全な発現形態がおそらく開発である。この点に、開発と援助をめぐると一つの混乱がある。国際開発というインターナショナルリズムが強調されると、開発におけるナショナリズムの重要性が等閑視されがちになる。

さらに、これはとても大切なことだが、各国の

<Profile>  
ひらの・かつみ  
1956年北海道出身。外務省専門調査委員、笹川平和財団、ウィットウォーターズランド大学客員研究員、ジェトロ・ヨハネスブルクセンター所長、地域研究センター長などを経て現職。著書に「アフリカ問題—開発と援助の世界史」「図説アフリカ経済」「経済大陸アフリカ」、編著に「アフリカ経済実証分析」「アフリカ経済学宣言」など。

※OECDは、国際経済全般について協議することを目的に先進国を中心に構成された。その委員会の一つであるDACでは、開発援助の質・量の向上について議論される。



# ココシリ

「ここが知りたい」  
国際協力に関する  
いろんなトピックを  
分かりやすく解説します！

ODA政策

## 「日本再興戦略とODA」 途上国とつながり 日本も世界も元気に！



ケニアで日本が整備を支援するオルカリア地熱発電所。地熱開発では世界最先端の技術を持つ日本がアフリカの家庭に光を届ける



Bangladesh でBOPビジネスを展開する日本ベーシック株式会社。自転車を使った浄水器という斬新なアイデアは、停電の多い現地のニーズを的確に捉えたもの(撮影:鈴木華)

### アベミクスの「三本の矢」とは？

- ①大胆な金融政策
  - ②機動的な財政政策
  - ③民間投資を喚起する成長戦略
- 「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」  
=ODAを活用した日本経済の再生！

**開** 途上国の貧困削減や経済発展を後押しする政府開発援助(ODA)。しかし、その舞台は途上国だけではない。今、日本の経済再生のツールとして注目を集めているのだ。安倍晋三内閣総理大臣が提唱する「アベノミクス」の3本の矢の一つ「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」や「平成25年度国際協力重点方針」でも、ODAを日本企業のインフラ輸出の拡大や中小企業の海外展開支援に活用する方針が示されている。

また、インフラといっても、従来よく知られている高速鉄道や港湾といった分野だけでなく、地上デジタル放送や防災、地熱発電、さらには病院の運営管理など、日本の強みを生かせる幅広い分野をODAを活用したインフラ輸出の対象とするとしている。

例えば地熱発電では、インドネシア国内での5つの地熱発電計画を対象に、「地熱開発促進プログラム」の第一期として、552・99億円を限度とする円借款、ケニアに対しては「オルカリアI4・5号機地熱発電事業」に対して295・16億円を限度とする円借款を供与。地熱資源が豊富な中南米でも調査などの事業を実施しており、今後はプロジェクトの早期段階から技術協力

や無償資金協力も活用して相手国政府と連携し、日本企業の進出を後押しするとしている。

インフラ以外では、中小企業の海外展開支援でもODAに期待がかかる。外務省では、平成24年度から本格的な支援を展開。多くの企業にとってノウハウや人材の不足が壁となっていることから、途上国での「ニーズ調査」、現地での事業展開に向けた「案件化調査」、優れた製品・技術の普及を目指す「民間提案型普及・実証事業」など、それぞれ事業段階に応じて選択可能なメニューを用意した。

これらを活用した調査やパイロット事業を経て、簡易浄水器による飲料水の供給、廃棄物処理によるリサイクルの推進、精密技術の普及、産業の生産性と品質の向上を目的とした産業自動

## 安

倍晋三内閣総理大臣は8月24日、バーレーン、クウェート、カタール、ジブチを訪問し、各国の要人と会談を行った。

今回の訪問の狙いの一つは、日本と中東諸国との「安定と繁栄に向けた包括的パートナーシップ」の一層の強化と拡大だ。安倍総理は各国での会談において、東日本大震災後にそれぞれの政府と市民から寄せられた温かい支援に感謝の意を表明。今後は、従来の資源・エネルギーという枠を超えて、より幅広い協力を推進していきたいとの考えを示した。具体的には、政治・安全保障分野での関係強化、経済関係の拡大・深化、教育、文化・人的交流の分野での協力強化で一致。その一例として、バーレーン、クウェートでは、新たに「コスト・シェア技術協力」の実施を検討するとしている。

ODA政策

## 「安倍総理の中東訪問」 安定と繁栄に向けた 包括的パートナーシップの強化

日本は今後、成長著しい中東地域の活力を取り込むことで、経済的、政治的にも同地域で一層積極的な役割を果たしていくことが期待されている。安倍総理は今年5月にもサウジアラビア、アラブ首長国連邦、トルコを訪問。今後も同地域との連携をより強化していく方針を示している。

また、ODA対象国であるジブチでは、日本の無償資金協力で建設された「フクザワ中学校」に「安倍文庫」として図書104冊を寄贈。また、海賊対策の一環として設置されている自衛隊の活動拠点を訪問し、隊員たちを激励した。ケレ大統領との会談では、「第5回アフリカ開発会議(TICAD V)」で表明したアフリカ支援策を着実に実施していくとともに、同国が強化しているインフラ整備などへの支援を継続していくことを約束した。

## 来

年は「日・カリブ交流年2014」4「カリブ海周辺の14カ国、1地域が加盟するカリブ共同体(カリコム・CARICOM)と日本の間で、さまざまな記念事業が計画されている。

カリコムとは、域内の経済統合を目指すとともに、加盟国間の外交政策の調整、共通のサービス事業実施、社会的・文化的・技術発展のための協力などを進めている組織。カリコム諸国は、民主主義という共通の価値観を日本と共有しており、さらに島国が多く、自然災害の影響を受けやすいなどの共通の課題に直面していることから、環境・防災分野においても日本の重要なパートナーとなっている。

2014年は原則毎年実施されている「日・カリコム事務レベル協議」が始まって20年、ジャマイカ、トリニダード・トバゴとの国交樹立50周年にも当

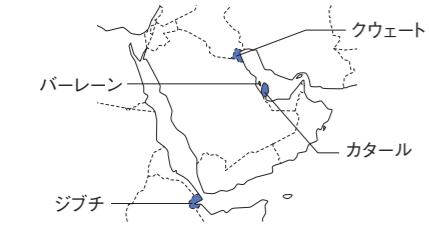
交流年

## 「日・カリブ交流年 2014」 カリコム諸国について知ろう！

たる節目の年だ。これを記念して、カリコム諸国との交流をより深めることを目的に、双方での協議を経て「日・カリブ交流年2014」が設定された。

そして、7月にガイアナで行われた「日・カリコム事務レベル協議」において「日・カリブ交流年2014」のロゴマークが決定。日本、カリコム諸国などからの98点の応募作品の中から、ガイアナ在住のガネシュ・ソムラ氏の作品が選ばれた。日本の象徴の一つともいえる折り紙の鶴とカリコム諸国でよく見られるヘリコニア(熱帯植物)の花のハイモニーとパートナーシップを示したデザインになっている。

2014年の行事については、決定したもののから外務省のホームページ(www.mofa.go.jp)で順次公開予定。これを機に、カリコム諸国について調べてみては？



**バーレーン**  
首都：マナーマ市  
面積：762.3km<sup>2</sup> (東京23区と川崎市を併せた面積とほぼ同じ)  
人口：約123.5万人

**クウェート**  
首都：クウェート  
面積：1万7,818km<sup>2</sup> (四国とほぼ同じ)  
人口：約325万人

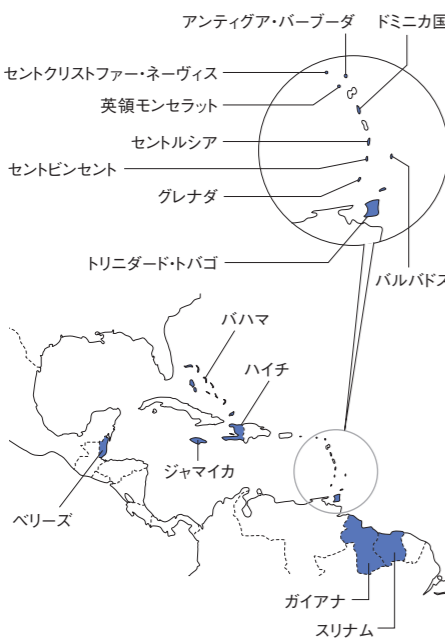
**カタール**  
首都：ドーハ  
面積：1万1,427km<sup>2</sup> (秋田県よりもやや狭い)  
人口：約191.6万人

**ジブチ**  
首都：ジブチ  
面積：2万3,200km<sup>2</sup> (四国の約1.3倍)  
人口：約90万人

### コスト・シェア技術協力とは？

ODA卒業国・移行国を対象に、先方政府に必要な経費を可能な限り負担させる有償の技術協力(サウジアラビア、オマーンではコスト・シェア技術協力の前身である有償技術協力を実施中)。

### ■ カリコム加盟国・地域



「日・カリブ交流年 2014」のロゴマーク



# 地域で守る命





D.ケリチョー一帯に暮らすのはキプシギス人と呼ばれる少数民族。牧畜を生業としながら、季節によって茶園やサトウキビ畑で期間労働をする人が多い  
E.ケニアの代表的な食べ物ウガリ。トウモロコシの粉を湯で練り上げて作る



E



D



リプトンの直営茶園で働く女性たち。農園には従業員の家族のための病院や学校まである

もかわならず、朝晩は肌寒い。多くの人が想像する「アフリカ」とはかけ離れている。

一帯には、黄緑色に輝く茶畑で覆われた丘が連なる。標高2000メートル、雨が多い気候は茶葉の栽培にうってつけ。100年以上も前、そこに目を付けたイギリス人が、インドからアッサム種の茶葉を持ち込んだそうだ。

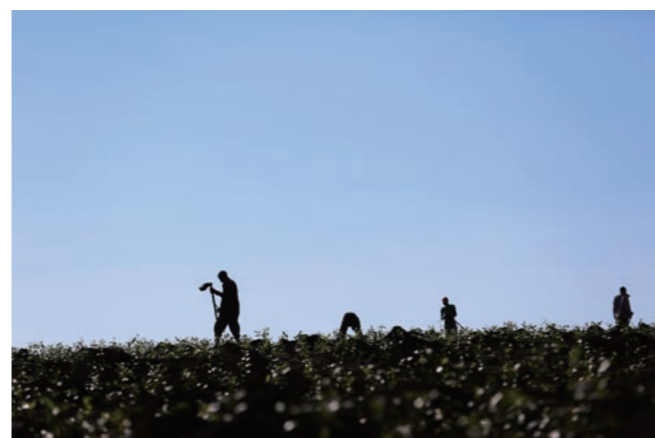
こうしてアフリカ最大の紅茶生産地となったケリチョーだが、本題は紅茶ではない。

他のアフリカ諸国と同じように、この国の経済も成長を続けている。しかしその恩恵は、農村地域にまで及んでいないのが実情。政府や自治体のサービスも十分に届いていない。そんな農村地域に国民の多くが住んでいる。ケリチョーもその一つだ。

もっと良い生活がしたい。そのためには「体」が資本だ。しかし、彼らが暮らすのは医療施設から遠く離れたへき地。物理的な距離だけでなく、命を守るための知識からも遠い。まずはこの距離を縮めなければ。地元の人々にそんな気持ちが生まれってきた背景には、ある日本のNGOの働き掛けがあった。



A



B

A.幹線道路沿いに広がる茶園。雨量に恵まれたケリチョーでは茶葉の収穫が年中可能  
B.新しい茶園のために手作業で開墾する労働者たち。茶葉もすべて手摘みだ  
C.ケリチョーではサトウキビ栽培も盛ん。毎日、朝7時から5時間ほど働く。日当は約400円だが一人で暮らすには十分だ

地球ギャラリー vol.61



C

紅茶の産地といえばインドのダージリンが有名だが、ケリチョーと聞いて、すぐに紅茶を思い浮かべる人がどれほどいるだろうか。ケニアの首都ナイロビから西のビクトリア湖の方角へ約250キロ、赤道直下に





カブレラッチ副地区の小学校で、子どもたちに手洗いを教えるHANDSの現地スタッフ



F



G

F.村の家族はどれも子どもたくさん。子どもを多く持つことが幸せにつながると考えられているため、産児数を制限するような家族計画は受け入れられにくい  
G.HANDSは生まれてから6カ月間、母乳のみで育てる完全母乳育児を推奨している

村を歩くと、赤ちゃんを抱えながら家事や畑仕事をしている女性に多く出会う。とにかくこの村の家族は子どもさん。世話をするにも手が足りず、子どもが赤ちゃんをおんぶしている姿もよく見かける。

そんな母親や子どもたちを対象に、母乳育児や予防接種、健康診断を推進し、妊産婦や乳幼児の栄養不良の改善に長年取り組んできたのがNPO法人HANDSだ。

住民自身に子どもの健康を守る知識を持つてほしいと、今、新たに「保健ボランティア」の育成にも力を入れ始めた。地元の人々が研修で保健の基礎を学び、その知識をそれぞれ

の村で伝える。彼らは村人の良き相談相手でもあり、村の隅々の情報を得るコミュニケーション回路にもなっている。

「私たちは医療行為ができるわけではない。限界も感じますが、それでもNGOにしかできないことがあるはず」。スタッフの網野舞子さんは今も模索している。

いつかこの地を去るNGOは、人々が直面する問題の解決者にはなれない。しかし近い将来、自分たちの健康は自分たちで守らなければならぬと彼らが考え始めたとき、NGOとしてのゴールが見えてくるのかもしれない。

2011年からプロジェクトコーディネーターとしてケリチョーに赴任している網野さん



H

H.キブシテット地区の診療所で予防接種を受ける女性  
I.日本で始まった母子手帳は、ケニアでも子どもの健康を守る大切なツール  
J.診療所で健康診断を終えた母子。設備は不十分でも、定期的な健診が最良の薬となる

地球ギャラリー vol.61



I





健康



街中にあるジムは「痩せてカッコよくなりたい!」と筋力トレーニングに汗を流す男性でいっぱい

ふくよかな女性ほど美しいといわれていたケニアだが、それは一昔前のこと。欧米の映画や雑誌が世にあふれる今、都市部では、ハリウッド俳優やモデルの体型に憧れる若者も多い。アフリカで4番目に糖尿病患者が多いことから、ケニア人の最近のもっぱらの関心事は“健康”だ。

そこで始まったのが空前のダイエットブーム。都市部のカフェでは“デトックスジュース”なる野菜ジュースがメニューに登場。高級ホテルの中になかったジムやヨガ教室も街のあちこちにでき、一般の人でも気軽に通えるようになった。早朝や夕方にはジョギングをする人も多く、首都ナイロビで開催される市民マラソンも、年々、参加者の数が増えている。まだまだダイエットへの熱は続きそうだ。



毎年ナイロビで開催されている「ソトコト サファリ マラソン」には多くの市民が参加

取材協力：NPO法人道普請人 酒井樹里

地球ギャラリー

ケニアの文化を  
知ろう!

ケニア料理と言えば  
青菜と肉のトマト炒め

スクマ・ナ・ニヤマ

ケニアの主食といえば、トウモロコシの粉をお湯で溶いて練った「ウガリ」。炒めものを包んだり、スープにつけたりするのが一般的。インドからやってきた薄焼きのパン「チャパティ」やコメもよく食べられている。

肉や魚、野菜などに、トマトを加えて炒めるのがおかずの定番。中でも、青菜と赤タマネギの炒め物「スクマ」は、「毎日食べても飽きない」そうだ。これに鶏や牛、ヤギなどの肉を意味する「ニヤマ」を入れた料理が、「スクマ・ナ・ニヤマ」。トマトの酸っぱさが肉の味を引き立てる素材の味を生かした一品だ。

日本でも数少ないケニア料理レストランが東京・経堂にある「SAVANNA」。日本ではめったに口にできない



いケニアの家庭料理が魅力なのはもちろんのこと、ケニア出身の店主、ハンシ・ルリ・アリさんとの会話を楽しみに来る人も多い。カウンター席だけのこじんまりとした店内は、アリさんを囲んでいつも笑いに包まれている。「日本人もケニア人もみんな兄弟。一緒に楽しみながら、おいしい料理を食べましょう」。

【RECIPE】

●材料(2人前)

鶏肉200g／赤タマネギ2分の1個／トマト1個／ホウレンソウ1束／コンソメ・塩少々

- 1 フライパンに油をひき、みじん切りにした赤タマネギを軽く焦げ目が付くまで炒める。みじん切りにしたトマトを加え、さらに5分ほど炒める。
- 2 ①にコンソメと塩を入れる。
- 3 ②に一口大に切った鶏肉を入れ、軟らかくなるまで炒めたらホウレンソウを加え、3分ほど炒めて出来上がり。

【SHOP INFORMATION】



SAVANNA (サバナ)

〒156-0052  
東京都世田谷区経堂1-19-7  
セントラル経堂B1階  
TEL:03-3428-4040  
営業時間:12時~15時、17時~23時  
日曜・月曜定休



# イチャオシ!

## M OVIE

### 『もうひとりの息子』

イスラエルとパレスチナの間にそびえ立つ高い壁。イスラエルが建設した“分離壁”は、両者の対立の象徴だ。イスラエルのテルアビブに暮らす青年ヨセフは、兵役のために受けた血液検査で衝撃的な事実を知る。18年前、湾岸戦争の混乱により、病院で他の赤ん坊と取り違えられていたのだ。本当の家族は、その壁の向こう側、ヨルダン川西岸地区に住むパレスチナ人。この事実を受け入れられない両家族が、困惑と葛藤の中で導き出した真の家族の在り方とは。宗教、民族、血縁、愛情。その狭間で揺れ動く家族の心情を繊細に描いた作品。



© Rapsodie Production/ Cité Films/ France 3 Cinéma/  
Madeleine Films/ SoLo Films

2012年／フランス／101分

監督：ロレーヌ・レヴィ

出演：エマニュエル・ドゥヴォス、パスカル・エルベ、ジュール・シトリュクほか

公開：10月19日(土)より、シネスイッチ銀座(東京)ほか全国順次公開

URL：www.moviola.jp/son/

配給・問：ムヴィオラ

TEL：03-5366-1545

## E VENT

### 『ワールド・コラボ・フェスタ2013』

今年で10周年を迎える中部地域最大の国際交流・国際協力のイベント『ワールド・コラボ・フェスタ』。この地域を中心に活動する市民団体・NGOや自治体、国際交流・国際協力機関、企業などが、それぞれの取り組みについてブースで分かりやすく紹介。メインステージでは、名古屋のアイドルグループOS☆Uと多文化共生について考えるイベントや、国際協力に携わる医師の桑山紀彦さんによる「地球のステージ」などが開催される。持続可能な社会のために何ができるかをみんなで楽しく考える2日間。

会期：10月26日(土)～27日(日) 10～18時

(「もちの木広場」会場は、両日とも10～16時)

会場：オアシス21「銀河の広場」、久屋大通公園「もちの木広場」(愛知県名古屋市栄)

問：(公財)名古屋国際センター

TEL：052-581-5691

URL：www.world-collabo.jp/

## B OOK

### 『フェアトレードのおかしな真実』

僕は本当に良いビジネスを探す旅に出た

身近にできる国際協力の一つとして、フェアトレード商品を買う人も少なくはないはず。でも、それが世界規模の大企業の商品だったら。本当に、貧しい人々の役に立っているのだろうか。そう疑問に思った著者は、開発途上国の労働者たちの現状を確かめるため、世界一周の旅へ。電化製品に使われるスズを掘るために鉱山で働くコンゴ民主共和国の作業員、大手レストランチェーンに供給されるロブスターを捕るために危険な漁に出るニカラグアの漁師など、先進国の便利な生活に翻弄される彼らの暮らしが浮き彫りになる。世界にはびこる“フェアではないトレード”の実情に迫った一冊。



コナー・ウッドマン 著  
松本裕 訳  
英治出版  
1,890円(税込)

この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

## B OOK

### 『世界がもし100億人になったら』

1万年前は100万人だった地球の人口。200年前には10億人、50年前には30億人、そして現在は70億人。今世紀の終わりには、100億人に達するともいわれている。しかしこのままでは、食料、水、エネルギー…どれも足りなくなってしまう。今、私たちを取り巻くのは、かつて経験したことのない地球規模の課題。地球の未来を明るくものに換えられるか、科学者である著者が数々のデータに基づいて分析する。



スティーブン・エモット 著  
満園真木 訳  
マガジンハウス  
1,575円(税込)

この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ



JICA広報誌は衣替えしました

2013年10月、「JICA's World」は「mundi」(ムンディ)に生まれ変わりました。「mundi」ー新しいJICA広報誌の名前です。ラテン語で「世界」を意味します。08年10月、新JICA誕生にあたって、世界100カ国以上で活動するJICAのストーリーをお届けする広報誌「JICA's World」を創刊しました。5年間にわたりご愛読いただき、誠にありがとうございました。

開発途上国の今とそこで生きる人々の姿、そして国際協力に携わるさまざまなアクターの活動を、より広く、より深く伝えたい。そんな思いを込めて、「世界」を意味する「mundi」に衣替えして、広報誌を刷新することにしました。これまで以上に分かりやすく、親しみやすい誌面作りを努めていきます。

記念すべき第一号の特集では、「市民参加」を取り上げました。NGO、市民団体、学校、企業など、国際協力に参画する主体は多様性に富んでいます。海外の現場で活躍する団体もあれば、日本国内でできる国際協力に力を注ぐ団体もあります。国際協力の経験を、地域の活性化に活用している団体もあります。ビジネスを通じて、途上国の人々の生活改善に乗り出した団体もあります。

一人一人が身近な一歩を踏み出していくことで、やがて大きな力になっていく。人と人のつながりが広がって、社会を変える大きな動きをつくっていく。私たちはそんな例をたくさん見てきました。

10月6日は国際協力の日。今月号が、あなたの国際協力の始めの一歩につながれば、私たちにとって望外の喜びです。これからも一層のご支援と、ご愛読をよろしく願っています。

JICA広報室長 鈴木規子

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報は統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2013年11月15日

Eメール：jica@idj.co.jp  
FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① スリランカのスパイス
- ② 書籍『フェアトレードのおかしな真実 僕は本当に良いビジネスを探す旅に出た』(p37参照)
- ③ 書籍『世界がもし100億人になったら』(p37参照)



本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2013年11月1日発行予定)

ASEAN

近年、著しい成長を遂げるASEAN(東南アジア諸国連合)。日本は長年にわたり、地理的にも近いASEANの国々と密接な関係を築いてきた。2013年は日・ASEAN友好協力40周年。共に成長する「パートナー」として歩みを進める日本とASEANの取り組みを紹介します。





©Yuki Asada

## 自然に優しいスパイスを食卓に

静岡市内にある小さなフェアトレードショップ「Teebom」。ドアを開けると、色鮮やかなアジアテイストの小物が並んでいる。

「いらっしゃいませ!」。明るい笑顔で迎えてくれる店主の今井奈保子さんはスリランカの青年海外協力隊OG。「店名はシンハラ語で“お茶にしましょ”の意味。気軽にお茶でもしながら立ち寄りしてほしいという思いで付けました」と話す。

この店の看板商品の一つが、スリランカ中央部、キャンディ近郊の村から届いたスパイス。コショウ、カルダモン、クローブ、ナツメグ…。品ぞろえも豊富だ。今井さんこだわりの“自然農法”で、農薬も化学肥料も使わず、村の男性たちが

手塩にかけて栽培している。

スパイスを入れる箱作りは女性の仕事。慣れた手つきでアシの葉を裂き、一枚一枚、丁寧に編み込んでいく。かわいいココナツの殻のスプーンが付いているのもうれしい。

「日本にもっとフェアトレードが広まるよう、スリランカの人たちと知恵を絞って良いものを作りたい」と今井さん。粉にすると風味が飛んでしまうため、“採れたまま”で販売するのがTeebom流。スパイスを使った手作りクッキーの販売も始めた。

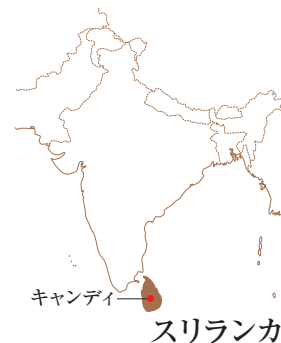
使うたびに、ふわっと香る自然の恵み。スリランカの爽やかな香りを食卓で味わってみては。



人にも環境にも優しい農法で生産されたスパイスは日本の女性にも人気

★スリランカのスパイスを6人、クッキーを2人にプレゼント! → 詳細は38ページへ

★商品は「Teebom」の店舗(静岡市)とホームページ([www.rakuten.co.jp/teebom/](http://www.rakuten.co.jp/teebom/))から購入可能







私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 36

## PROFILE

1980年東京都出身。日本大学芸術学部映画学科卒業。99年、舞台『BOYS TIME』でデビュー。2000年、『池袋ウエストゲートパーク』の出演で注目を集め、ドラマ、映画、舞台、CMなどで幅広く活躍。今後の出演に、宮藤官九郎作・演出『大バロコ人②バカロコオペラバカ「高校中バニック!小激突!!」』（バロコ劇場・2013年11月24日～）、ODA広報番組『佐藤隆太の地球元気!』（テレビ東京、毎週金曜21時54分～22時）に出演中。

今年の6月から、日本の国際協力を紹介するテレビ番組に出演させていただいています。これまでも海外に行く機会があったのですが、実は開発途上国とはあまり縁がなかったんです。ですから、最初にこのお話をいただいた時、正直僕に務まるのか不安がありました。でも、制作サイドから日本の国際協力について聞いていたうちに、これまでまったく自分が触れたことのない世界について、純粋に“もっと知りたい”と強く感じました。そして、視聴者の皆さんと同じ目線で、僕自身も学び、そこから何かを発信していけたら、と思ったのです。

緊張の中迎えた第1回目のゲストは、マレーシアの海上保安組織で活動されている日本の海上保安官の方。僕自身も演じたことがあり、なじみのある職業でした。海上保安庁が海外でも活動していることは役づくりを通じて知っていたのですが、実際の現場から伝わってくるお話は迫力があり、まさに世界の海を守っているのはこの人たちなのだ。その他にも、民間企業やNGOの方々と出会い、国際協力の

志を持って生きる

俳優 佐藤 隆太

SATO Ryuta



現場をこの目で見てみたいという思いがふくらんでいきました。

そして7月、初めてのロケでインドネシアに行くことができました。首都ジャカルタの街はビルが立ち並んでいて想像以上の大都会。一方で、少し離れるとスラム地区が広がっていて、そんな2つの現実が同時に存在することに驚きました。あちこちにごみが散乱しているのも気になりましたが、現地の人たちは決して悪気があって捨てているわけではなく、ポイ捨てが習慣化しているようでした。ごみに対する人々の意識を変えていくというのは、簡単なようで、とても難しいのではと感じました。

一方で、現場には、この国を良くしようと現地の人たちが奮闘している日本人がいらっしゃいました。大学の研究者、建設業者、開発コンサルタント、青年海外協力隊員…。さまざまな困難が立ちはだかる中での生活はとても大変そうに見えたのですが、「この仕事が好きでやっているから」という、とても気持ちの良い言葉が返ってきました。自分が向かっていくべきものに出会えると、こんなにも人は生き生

きとするんですね。

どの業界でも、限られた期間で着実に成果を出すことは、並大抵の努力では達成できません。目の前の課題に真剣に向き合い、強い志を持った日本人と現地の方々がいるからこそ、インドネシアも発展に向けて前進できているのです。そんな彼らの真っすぐでぶれないパワーに力もらいましたし、僕自身も役者として気が引き締まる思いでした。

今回の訪問を経て、一人一人のつながりが、国と国とのつながりになっていくのだと知り、日本人として、とても誇らしく思いました。僕自身もこれから番組を通じて、途上国やそこで活動する日本人についてももっと知ってもらいたいと志を新たにしました。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で